

巻頭言



所長原島文雄

Fumio
HARASHIMA

年頭所感

新年おめでとうございます。世界的にも国内においても激動の歴史の中にいることを実感しつつも、皆様方にはよい正月を迎えられたこととお慶び申し上げます。

個人の生活と世界状況がこれほど密接に関連し、個人個人が自分の主体性の中で人類の将来について考えなければならない状況は、歴史の中で始めてのことと思いますが、人類の将来をわれわれ自身で創り出す機会に恵まれたことを感謝すべきでしょう。

科学技術の進歩、特に交通・通信の発達により、世界が1つとなり、またわれわれが高い生活レベルを享受している現在、「行動と思考」のバランスについて最近自分自身で反省しています。研究・教育のため世界中を駆けめぐる忙しい生活、パソコン通信で結ばれた世界の友人・同僚との一体感、ワークステーションとの共同作業など「行動」にかたよった生活を多少とも反省し、個人としてゆっくり物事を考える時間がほしいものです。

人類の将来という大袈裟な事ではなく、身近な東京大学についてもいろいろと考えさせられます。大学院部局化、キャンパス再配置、外部評価など多くの重要な問題について目先の利害にとらわれず、ゆっくり将来をみきわめたいものです。

生産技術研究所は、「自由でかつ創造的な研究・教育の場」として、工学価値貢献、高等技術者教育貢献、社会貢献、国際貢献を旗じるしとしています。大学の研究所として前2者は当然ですが、生研の存在と価値を社会に認識していただくために、後2者についても活発に行っております。

社会人教育としては、生研講習会、生研セミナー、生研基礎講座、生研イブニングセミナー、生研学術講演会を毎年開催し、これまでの参加者は約2万8000人に達しています。また生研の研究成果を広く公開するために「生研公開」を毎年継続して行っており、現在39回を数え、例年3000～5000人の来訪者があります。

産業界との連携もますます盛んであり、民間との共同研究、委託研究・奨学寄付金、産業界からの研究員の受け入れなどの形で実施されています。民間との共同研究は、平成4年度には21件（約4億円）、委託研究と奨学寄付金は平成3年度においてはそれぞれ10件、427件（総額8億2600万円）に達しています。さらに産業界との連携は寄付研究部門を受け入れることによっても、活発な交流がつづいています。

生研のもう1つの特徴である国際貢献について考えてみましょう。生研は研究により創成された知的ストックを世界に向けて発信し、また世界の情報をいち早く受信して研究に生かすという役割を果たしています。生研の教官が1987年から1992年までの間に学術雑誌に掲載された原著論文（査読を経たもの）3537件の中、65%以上は英文で発表されており、世界に向けての情報発信の役割を果たしています。さらに論文数だけでなく、招待講演、国際的受賞も著しく多く、生研の教官が参加する世界各地で開催される国際会議の多くは、生研の教官が主催者の一部となっており、生研の教官が情報発信の場の実現に関して自ら参加し、その重要性を増大させていることがわかります。

レシプロカルアクセスの受け入れ機関としては、外国人研究者・学生を積極的に受け入れております。現在、教授総会メンバー（教授，助教授，講師，客員を含む）に7名の外国人がおり，長期滞在の外国人研究者は平成4年度には70名，大学院生は108名に達しており，生研の全構成員の約20%は外国人です。

最近，大学の評価に関する議論がよく行われております。生研に関しては，前述してきましたように，社会への貢献を常に心掛け，社会から正しい評価を受けるべく努力いたしております。

“生産技術研究所は，優れた頭脳とよき市民の集団であり，社会がこの存在を誇りに思っている”

このような評価を社会からいただけることを目標としております。今年もがんばりましょう。